

「いわんや悪人をや」

藤元正樹師述

これが大事なんです。お釈迦さまも、もとは護法菩薩という名をもつ天人です。それが人間にかえったんです。これが大事な事なんです。普通、六道輪廻といつて、煩惱のままに生きている人間は天人になるんです。そうでしょう。誰でも上にあがりたいでしょ。一番上にあがって、その次どこへ行くかといったら地獄です。それが人間にかえられた、それが大事なんです。此の頃、年寄りをあまり大事にしないからそれがわからないですが、年をとってから人間がわかるんです。人間にかえるという事がわかる。もう帰りすぎてどうにもならないという事もあります。

だから、生老病死というけれど、これが法なんです。厳粛な人生の事実なんです。生まれて、老いて、病んで、死んで、嫌といったってそうはいかんでしょ。こればかりは。物の道理というものは。人間の思いで変えることのできない物、自由になるもんでないこと、これを法というんです。法というのが道理をいうんです。

ところで、人間の存在、行為、経験というものは、必ず善、悪、無記におさめられる。無記というのは、善でも悪でもないもの。これを俱非といいます。これが大事なんです。無為法でいえば無記というのが仏さまのさとり。これを清浄という言い方をします。

だいたい皆さん方、お浄土というのを勘違いしてもらっては困るのですが、よい所でも悪い所でもないんです。どんな所かといえ、清らかな所です。極楽という所は、清浄、清らかな所という意味。皆さん方で酒を飲む人があつたら承知しておいて下さい。お浄土にはお酒はないんです。あるのはただ一箇所。阿鼻叫喚地獄の別所にあるのです。これは実際お経の中に書いてあるのです。八大地獄の中の一つです。阿鼻叫喚というのは、喧嘩すること、わめきあいでいること。別所というのはセカンドハウス。本所と違うんです。そこへ行きますと、酒が飲めるんです。ただし、その本所から別所へ行く間が大変なんです。ここは大地が火の灰。だから足を入れて、次に抜いたら焼けただれて骨だけになってしまふような所。そのような痛い目にあつて行く所が別所。あなた方、笑っているけれども、主人が酒飲みに行っている時にはそう思つてあげなさい。あれは苦勞して行っているんですよ。

なんで行くんかといつたら、阿鼻叫喚地獄にいるからです。家で夫婦喧嘩すると、行く所がなかったら飲みに行くしかないでしょう。何も楽しんで行っているのと違いますよ。痛い痛



い思いをして行っているのです。

清浄という事は、善でも悪でもない所。御飯を炊くのも、一番基本になるのは水です。つまり、料理の一番基本になるのは水です。つまり、味も何にもないもの。いくらいいお茶、いいお米があつても、神戸や大阪の水道の水で炊いたりしたものはいただけたものではない。

この辺は幸せですよ、まだ。つまり、味も何もないけれど、何もなくても、それを清浄味というんです。最も、清浄なる味、そしてそれがあらゆる料理の基本になる、そういう世界を心で表わせば、これを浄土というんです。

人間の価値、値うちは、善、悪、無記でおさえられ、人間生きていくという事が、何らかの価値をもち、何らかの人に影響を与えているでしょう。おばあさんにして、邪魔になつていくか、おばあさんのおかげか、どっちでもないという事もあるでしょう。孫にとっては、おばあさんは値うちがある。これは善。息子の嫁にとつては邪魔になるから悪。どっちでもない時は、お寺へ参っている時だけです。(笑)

もどしますと、経験の価値というか、値うちというものには、善・悪・無記という三つの性格があると申したんですが、善とか悪とかいう言葉の意義は、仏教では順益とか違損といいますが、初めての言葉であるかと思ひますが、人間は必ず一つの境遇をもっているのです。

それは仏教の言葉ですよ。その境遇が自分に対して順益になるか、違損になるかです。境遇という言葉はなかなか面倒ですが、人間が生きている限り、何かの境遇をもっているのです。境

というのは環境。遇というのは人です。人に対していうこと。いくら環境はよくてもまわりにいる人間が悪いということもあるでしょう。

あまり大きな声ではないええないけど、富山に売薬する方がおられるでしょう。その売薬さんが語っておられました。この播州で一人前の商売ができたなら、全国どこへ行っても通用するそうです。何故かという、播州という所は、まともにお金を払ってもらえないそうです。だからお金をまともにも払ってもらえたら一人前というのを聞かされたことがあります。だから場所がいいが、人は悪いという事です。

人間の環境というけれど、たんに環境だけではない。人間の環境の一番大事なことは、どんな人と一緒にいるかという事です。少々環境が悪くても、まわりの人がいい人であれば、それはいい所です。だから、境遇というのは、そういう二つの意味をもっているんです。場所ともの一つは人。なんにもお金がある家に行くだけが幸せではないですね。主人がよかったら、金がないくらいどうもないと私は思います。仏教では、人間は生まれてから環境をもつのと違うのです。インドの思想でいったら、人間の境遇を決定する一つには神意説がありますが、それは神さまの心で、人間の境遇が決められる。

先程言いましたように、仏教は神さまをたてませんから、この神意説を所定するんです。だけど、バラモンの教えは、お釈迦さまがお生まれになった頃には、既にあったのです。このバラモンの教えからいくと、インドには随分階級が多いんです。極端なことを言い支したら、例

えば食堂では、テーブルをふく人、テーブルかけをかける人、皆その職業が決まっているんです。本願寺でもかつてはそうですよ。内陣外陣の闕(しきい)の一番上は、内陣を掃除する人がふけるんです。その次の段をふいたら駄目なんです。次の段をふく人は、下を掃除する人がふくのです。インドでは、そんな階級制度が非常にきついのです。その階級は何で決められるかという、神さまの心です。何故、私はこんな階級に生まれたのかと思っても、それは神さまが決めたのです。どういうふうに分けられたか知りませんが、とにかく神さまの心で私達の境遇が決められている。

それからもう一つは宿命説。それは前世で悪い事をしたら、悪い所に生まれるというのが宿命説。自分がしてきた事が今の結果になっているというのが宿命説。しかたがない、自分がしてきたことだから、あきらめなさいというのが宿命説。仏教は、このどちらともらないんです。どちらも否定します。どうしたかといったら業薰習説。宿るといふ事は過去という意味です。説明していたら長くなりますので、とりあえず、仏教は神意説でもない、宿命説でもない、宿業説であるという事だけ心得ておいて下さい。

業という言葉ですが、これは一般的にいったら、業行といって人間の行為と同じ事ですが、この業という意味は、たんに行ではない。人間が何かをするという事と違うのです。むしろ人間をつくるものを業というんです。仏教では業のことを造作といえます。人間の顔を造作するというのです。仏さまの場合は、相好といいま

す。ちよつと違うのです。造作という場合は、人間をつくるという事。仏教では、皆さんの顔は、皆さんが毎日つくってきたんです。毎日にこにこしていたら、顔のしわは横に寄るんです。毎日怒っていたら、しわは縦に寄るんです。帰って鏡をみて下さい。自分をつくるのを業というんです。

自分が何かをするとき、自分がつくってきた事、自分で



から自業自得というでしょう。これは仏教の言葉です。御和讃にも自業自得の道理にてといっています。

自業自得を道理にしてある。そういう場合に、業ということはいいます。だから自業自得といったら自我。我といふものをつくってきた行為。だけど、我が何かをするのではなく、我をつくってきたという事がある。そういう場合に業というんです。